

## 政府の中のアナルコ・サンジカリズム

最後に、それが提起された当時、夥しい言葉とインクとを費やさせた、今日でもなお激しい議論を惹き起こさせる、厄介な細心の注意のいる問題を取り上げる。

スペイン共和派の二つの政府、共和国中央政府とカタルニャの自治地方政府への、《反ファシスト統一戦線》の枠内でのアナキストたちの参加は、事実、イベリア半島アナキズムのアキレス踵の一つである。

まったく同時に、《純正》アナキストたちと非スターリン主義的なマルクス主義者たちは、つねに過去を顧みて、アナルコ・サンジカリストたちに、彼らが原則を打ち捨てたために、激しい不満を抱いていたし、抱いている。しかしこの批判は、いくぶん絶対的なものの中に身を置きすぎているのではないか？ それは、スペイン革命がもし生きのびることを望んでいたのならぜひとも勝たねばならなかったという、内乱の文脈をあまりにも容易に考慮に入れなかったのではないか？

——失礼！ それはまさしく、スペイン革命の存続を危うくした、スターリン主義者たちに次第に浸透された、共和派諸政

府の機構の中への統合だった、と非妥協的な人々が反論する。

ここには、論争のかなり完全な関係文書を掲載する。

第一に、スペイン革命の瀬戸際に、スペインの絶対自由主義者たちによって述べられた激しい原則的立場で、それは、《反ファシスト》連立政府の仮借ない告発から出発している。

ついで、突然の驚くべき逆転を正当化する、骨身を惜しまぬ試みである。

ついで、スペイン革命の戦列に加わるために来たイタリアのアナキスト、カミロ・ベルネーリが、暗殺される直前に、当時中央政府の大臣であったフェデリカ・モンツェーニにあてた、激しい誹謗である。

最後に、結論として、特にこのアンソロジーのために、フェデリカ・モンツェーニによって事件後三十年余を経て書かれた自己批判である。

## 政府の無用さ

(CNTによって採用された宣言)

「豊かな国々は、人々がそこでは概して貧しい国々である」。このあるブルジョア経済学者の言葉は、われわれの社会の対照をよく表現している。この社会では、諸国民の力は、最大多数の人々の衰弱と貧困とで作られている。同じやり方で、こうもいいうる、強力な政府を作るもの、それは弱い民衆である、と。

人民戦線政府の存在は、反ファシスト闘争における不可欠の要素であるどころか、実際には、その同じ闘争を勝手に限定することと呼応しているのである。ファシスト反乱の準備を前にして、カタルニャとマドリドの政府が絶対に何一つしなかったこと、それらの権力のすべては、無意識的にかかそうではなしたか、遅かれ早かれそれらがその道具となることとなった陰謀を、覆い隠すために活用されていたことを、想起してみるまでもあるまい。

スペインでつづけられている戦争は、社会戦争である。諸階級の均衡と維持にもつづいている調停者である国家という役割は、国家の基礎そのものを毎日崩しているこの闘争の中では、積極的な役割であることはできない。したがって、スペインにおける人民戦線政府の存在は、人民大衆と国際資本主義の間の妥協の反映以外の何

ものでもない、というのには確かなことである。

時勢の力そのものによって、一時的な価値しか持たないこの妥協は、社会革命の要求と完全な計画に席を譲るべきであろう。その時、現在バルセロナとバレンシアとマドリドの共和主義者たちと自由主義者たちに属している、交渉者と管理者としての役割は消滅するのである。

スペインにおける交換の相場と外国資本の所有の番人、弱体な政府を、イデオロギーと《革命的》政治組織にもとづく強力な政府に代えようとする考えは、事実上、武装した労働者大衆の自治的な活動を中断し清算すること、革命を中断し清算することにしに到達しないであろう。

もしマルクス主義が権力を握れば、日和見主義的な知恵による、大衆活動の自己制限以上のことが問題となる。持続するために作りだされた《労働者の》国家は、当面の任務として、今日プロレタリアートと農民の陣営の中で自由を享受している諸勢力の全体を、集中し吸収することを自己に課している。《労働者の》国家は、すべての革命的進歩の最終点であり、新しい政治的奴隷制の初まりである。

反ファシスト戦線の各勢力を調整すること、広大な規模で軍需品と食糧の補給を組織すること、そのため民衆にとつて重大な利害関係を持つすべての企業を共有化すること、そうしたものは明らかに現時点の任務である。

それらはこれまで、政府中心的ではない、中央集権的ではない、軍国主義的ではない、方法で実現された。つづけることのみが必要である。この方法の中には、加えるべき大きな改善の余地がある。CNTとUGTの組合は、そこに自分たちの力の使用、自分たちの能力の最善の活用場を見ている。反対に、多数派と少数派の陰險な闘争を伴う連立政府の設置、そのエリート官僚化、それが敵対する諸傾向の中で生みだす兄弟殺しの抗争、これらすべては、スペインにおけるわれわれの解放をはかる任務の達成にとって単に無益であるどころではない。それは、われわれの行動力の、われわれの統一の意志の、急速な崩壊、いたるところにいる敵を前にした宿命的な潰走の初まりであろう。

われわれは、スペインと外国の労働者が、全国労働連合(CNT)とイベリア半島アナキスト連盟(FAI)によってその意味で行なわれた諸決定の正しさを理解することを希望する。国家の死滅は、社会主義の最終目標である。事実上、それは実際には、《社会主義》官僚主義の自発的な死滅によってではなく、経済的収用のために仮死状態となった、ブルジョア国家の清算によって成り立つことを、証明している。

スペインの例とロシアの例は、その証拠である。

## ある正当化の試み

しかしながら、数週間のうち、九月の半ばに、CNTはその立場を逆転させた。《反ファシストの統一》の名の下に、CNTは、CNTがその五つの椅子を獲得することとなる十五人のメンバーからなる《全国防衛委員会》の設置を、スペイン中央政府首相ラルゴ・カバリエロに、要求しなければならぬ、と考えた。そこから、大臣としての参加までは、もはや一歩しかなかった。アナルコ・サンジカリストたちは、それを飛び越えた。彼らは結局、二つの政府、まずカタルニャの地方政府、ついで中央権力の中で、大臣に就任した。いかにCNTがこの手直しを正当化しようとしたかは、以下に見られるとおりである。

CNTがスペインの国政指導への参加を要求して以来、ふた月が過ぎた。われわれは、新しい機関を創設することが必要であると考える。われわれが全国防衛委員会の設置を示唆したのも、そのためである。われわれは、われわれの反対を動機づけていた障害を取り除こうとする誠実な欲求をもって、われわれの思想を放棄した。一度ならず、われわれは、政治的計算によってではなく、勝つのに必要な統一を実現するために、妥協した。

今は、思弁にふける時でも、ささいなことを気にとめる時でも決してない。新政府の任務は、昨日の政府のそ

れとは同じものではないことに、特に注目すべきである。CNTによって保持された大臣の地位は重要なものではないにもかかわらず、省内におけるその存在は、省の態度や活動を変更するはずである。注意は、現在の二つの大問題にそがれなくてはならない。生きるために、必要なすべてのものを新しいスペインが備えるために、戦争に勝つこと、経済的再建を強化すること、である。それら二つの目標達成を心がけないいかなる政府も、長続きすることはない。

人々は前の政府を、勝利の政府として語った。現実には、それが何一つそうではなかったことを証明した。反対に、事態は次第に悪化した。今日、実験が繰り返されてはならない。七月十九日以来指導を引き受けた各大臣が失敗したその場所で、今日のものは成功しなくてはならない。そのためには、新政府に加わったすべての人々が、勝つという唯一の考えによってのみ行動するため、自分たちの好みか信奉している企図を、取り除かねばならない。もし、そうした率直な無私の協力が実現されるなら、戦争の必要と一般民衆の要求を満たすことのみが各自のすべての行動を規定するなら、その時、間もなく勝利はわれわれに微笑むであろう。

二つの問題が提起されている。ファシズムに勝つことと、革命スペインを窮乏から救うこと。ここにこそ、目標がある。それらに到達するために、皆は誠実な無私の協力の中で活動している。

行なわれた決定の、弁護人になるであろう。歴史的な宿命は、すべての事物にのしかかっている。この宿命、CNTはそれを、速やかに戦争に勝ちながら、大衆の革命のあらゆる逸脱を妨げながら、国に尽くすために受け入れた。

われわれは、政府の中でCNTを代表するために選んだわれわれの同志たちが、彼らが引き受けた義務と使命を果たすことができるであろうことを、絶対的に確信している。彼らの中に、人々は個人を見てはならない。そうではなく、彼らが代表する組織を見るべきである。彼らは、統治者でも、国家主義者でもなく、反ファシスト勝利のための、戦士であり革命家である。そして、その勝利は、われわれが彼らに与えるであろう支持が大きければ大きいだけ、ますます早く完全なものとなる。

#### CNTの政府への参加

スペインのサンジカリストたちは、国の指導に参加するよう運命づけられていた。ファシズムに対する闘争の新局面は、スペインのサンジカリストとアナキストの運動の発展の中で、ただ一つの理論的見地から考察されてはならない。七月十九日に、革命運動の先頭に立って、ファシストの將軍たちとの会戦に進軍したのは、アナキストたちでありサンジカリストたちであった。反ファシスト民兵の創設とカタリニャにおける産業の共有化は、主としてCNT=FAIの仕事であった。

#### CNT、政府、国家

CNTの中央政府への参加は、わが国の政治史が記録する、最も卓抜な事実の一つである。久しい以前から、原則と確信によって、CNTは、反国家的であり、あらゆる形の政府の敵であった。しかし、人間の意志よりもほとんどつねに強力な、だが人間の意志が限定しうる、状況が、スペインの政府と国家の性格を変えたのである。

現在においては、国家の諸機関を調節する道具としての政府は、労働者階級に対する抑圧の力であることを止めた。同様に、国家は、すでにもはや社会を諸階級に分割する機構を代表してはいない。そして、CNT出身者の介入によって、国家と政府は、そのためますます、民衆を抑圧することを止めるであろう。

国家の諸機能は、労働者諸組織の賛同をえて、国の経済的、社会的活動の進行を規則正しくするという機能に、縮減されるであろう。そして政府は、戦争を見事に指揮することと全体の計画にしたがって革命の事業を調整すること以外の配慮をしないであろう。

わが同志たちは、あらかじめ各種の大きな総会に結集した、労働者大衆の、共同のいしは大多数の意志を、政府に伝えるであろう。彼らは、個人的な基準の弁護人にはならないであろう。そうではなく単に、CNTの中に組織されているいく十万人の労働者たちによって自由に

しばらくの間、二つの種類の政府が存在した。一方にはカタリニャ地方政府があり、他方には反ファシスト民兵委員会と経済評議会とがあった。この二元性が存続しえないことはすぐに理解された。そこで、あらゆる反ファシスト組織からなる、地方政府の総評議会が生まれた。サンジカリストたちとアナキストたちが反ファシスト勢力の過半数を代表していた、カタリニャでも、レバントでも、アラゴンでも、ファシズムは完全に絶滅された。それに反して、社会民主主義者たちやその他の党派が優勢であった管区では、闘争は同じように望ましいものではなかった。

マドリードでは、サンジカリストたちは少数派であった。しかしながら、その影響力はここ近々の間に増大した。ふた月以上も前から、CNTは、政府の解消と、CNTもUGTもともに参加する、全国防衛評議会の設置を要求していた。ラルゴ・カバリエロは、権力の操縦棒を取り上げられることを望まなかった。彼は、スペインのレーニンであることを望んだ。彼の政策は、反ファシスト闘争の戦線を弱体化しがちであった。異なる党派や組織への武器の分配は、不公平に実施された。そして、戦争指導における統一の必要は、つねにより緊急のものとして感ぜられた。

革命の兵士でしかないこと、共産主義者と社会主義者を將軍として行動させておくこと、こうした扱いは、サンジカリストとアナキストを満足させえなかった。彼ら

もまた、戦争の遂行についての全国的な討議の中で、発言する権利を持っていたのである。それが、全国防衛評議会の創設についてのCNTの提案の意味していたものであった。カバリエロは、彼の権力を何一つ放棄しようとしなかった。しかしながら、マドリッドにおける軍事情勢は、毎日、いつそう危機をはらんだものとなった。戦争指導における統一は、CNTがその指導を共にするようにならなければ不可能であった。

CNTによって全スペインに掲示されたパネルは、こう読むことができた。「二百万の提携者たち、戦線に五千の兵士、二千以上の地方組織、CNTの手中にあるカタルニャ、レバンテ、アラゴン」。この強力な組織が、反ファシスト闘争の指導への参加を要求したのである。大部分がCNTの支持者からなる地方防衛委員会が、アラゴンで結成された。その時、マドリッドの政府は、CNTの要求に応じることを強いられたのであった。四人のサンジカリストが閣議に加わった。それは初まりである。CNTは、より以上の数を要求する権利がある。しかし、今は、諸党派の抗争の時ではないのである。

#### 反対意見

カミロ・ベルネーリのフェデリカ・モン  
ツェーニへの公開状(一九三七年四月)

親愛なる同志よ、

は、いつの日か君に直接話したいと思っている。私が君に公開状を書くとするなら、それは、君の謙讓さのためにおそらく君が理解していない、巨大な責任を君に想起させるために、もつとほるかに重大な主題についてだ。

君の「一九三七年」一月三日の演説の中で、君はいった、「アナキストたちは、革命の逸脱を妨げるために、戦争を越えて革命を追求するために、さらにどこから来るものであろうと独裁への試みのあらゆる偶発性を抑えるために、政府に入った」と。

よろしい！同志よ、四月に、(政府の)共同の三カ月の経験ののち、われわれは、重大な諸事実が生まれつつある、そしてもつと悪いことがすでに現われている、そういう状況の前にいる。

バスク地方や、レバンテや、カステイリヤのような、われわれの運動が下部の力によって、つまり広汎な組合の枠と大衆の圧倒的な賛同によって強制されていないところでは、反革命が圧制を行ない、すべてを粉碎する怖れがある。政府はバレンシアにある。そして、防衛のために形成された革命的な中核を武装解除するはずの機動隊が発するのには、そこからだ。人々は、ビラネーサを思いつつカサ・ビエーハスを想起させる。武器を持っているのは民警と機動隊だ。後方で《統制にしたがわぬもの》を統制する、いかえれば若干の小銃と若干の拳銃を備えている革命的な中核を武装解除する、任務に当たっているのもまた、彼らだ。そのことが、(トアッ)

私は君たち皆、同志である大臣たちに手紙を書くつもりでいた。しかし、一たび手にペンを取ると、私は知らぬ間に君だけにあてて書いていた。そして、私はこの本能的な衝動に逆らおうとしなかった。

私がいつも君と一致しなかったこと、そのことは、君を驚かさないうし、君をいらだてもしない。君は、人間ゆえに不当で過度なものだと見なしてもほとんどつねに差支えない批判を受けても、心から忘れていた様子だった。このことは、私の意見では、ささやかな美質ではない。それは、君の精神のアナキストの性格を証明している。それは、君がきわめて個人的な文体の君の記事の中や、感嘆すべきほど雄弁な君の演説の中でしばしば表明した、イデオロギー上の異常さへの不満を、もちろん私の友情にとつて、有効に埋め合わせ確信だった。

私は、バクレーニン主義のアナキズムとビ・イ・マルガルの連合主義的共和主義との間の、君が確認した一致を冷静に承認することはできなかった。私は、「ロシアにおいて、ロシアの真の建設者はレーニンではなかった。それは、実行的な人物、スターリンであった、云々」と書いた君を許すことはできない。そして私は、ロシア・アナキズム運動についての完全に間違った君の断定に対する、「自由な土地」の中でウオーリンの回答に賛成した。

しかし、私が君に話したいのは、そのことではない。それらのことについて、またもつと別なことについて

内部戦線が清算されていないに行なわれている。それは、戦線が近く、極端にはっきりとしている地方では、厳密にいつて確かではないが、あらゆる奇襲が可能な内乱の渦中で、行なわれているのである。それは、イベリアのウクライナ、カタルニャの外壁、アラゴンにおける農業共有化の武装護衛隊、アラゴン戦線に厳密に必要な(厳密に必要なもの)が十分なものであることを希望しよう)武器をしか供給しない傾向を持つ、武器の政治的配分がはつきりと現われた時に、行なわれている。君は、一九三六年七月以来、モロッコの政治的自治を公式に宣言する必要があるにもかかわらず、モロッコにおける利権をフランスとイギリスに与えている政府の中にいる。私は、アナキストである君、君は、この卑劣であり間抜けでもある事実について考えなくてはならない、と思う。しかも私は、君やそのほかのアナキスト大臣たちは、類似の提案の性格や内容について同意しないことを、知らしめる時が来た、と考える。

一九三六年十月二十四日、私は「階級戦争」の中に書いた。「ファシスト軍の作戦基地はモロッコである。汎イスラム主義の影響力のあるあらゆる分野に、モロッコの自治のための宣伝を強化すべきである。モロッコの放棄とモロッコの自治の保護を予告する曖昧でない宣言を、マドリッドに強制すべきである。フランスは、北アフリカとシリアにおいて反乱が起きる影響の可能性を、心配しながら考えている。イギリスは、エジプトの自治

主義者たちの運動とパレスチナのアラブ人たちの運動が強化されるのを見た。イスラム世界における反乱を爆発させる怖れのある政策を通じて、似たような懸念につけこむべきである。そうした政策のためには、資金が必要であり、アラブ移民のすべての中心地に、フランス領モロッコのすべての国境地帯に、扇動者であり組織者である密使を緊急に送る必要がある。アラゴン、中央、アストゥリアス、アンダルシアの各戦線では、何人かのモロッコ人が、(ラジオやビラ等々によって) 宣伝者の役割を果たすことができる」

モロッコにおけるイギリスとフランスの利権を保証し同時に反乱を促進することができないのは、いうまでもない。パレンシアは、マドリドの政策を継承している。それを変えることが必要だ。そして、それを変えるためには、(パレンシア) 自身の思想をすべて強くはつきりといわねばならない。というのも、パレンシアにおいて、諸勢力がフランコと妥協しようとして動いているからだ。

ジャン・ジロムスキーは、三月三日の『ル・ポピュレール』紙に次のように書いている。「策謀が眼に見えてい。そしてそれらは、実際にはスペイン革命の停止のみならず、実現された社会的獲得物の取消しをも意味するであろう、和平の締結を狙っている。反カバリエロ、反フランコ、そうしたものが、現在ある構想を簡略に表明する公式であろう。私は、その構想が、イギリスにお

ける、またフランスにおける、政治的、外交的な、そして政府内のいくつかの流れの好意をえていないとは、信じていない」

これらの諸勢力、これらの諸策謀が、さまざまな曖昧な点を説明する。たとえば、王党派の艦隊の不活動を。モロッコから出た諸勢力の集中、カナリアスとバレアレス(巡洋艦)の海賊的行為、マラガの占領は、その不活動の結果だ。そして、戦争は終わっていない! もしブリエートが無能で呑気なのなら、なぜそれを大目に見ているのか? もしブリエートが艦隊を活動させない政策に縛られているなら、なぜその政策を告発しないのか?

君たち、アナキストの大臣たち、君たちは、雄弁な演説をする。君たちは、輝かしい文章を書く。しかし、戦争に勝つのは、革命を防衛するのは、演説や文章によつてではない。守勢から攻勢に移ることを可能にすれば、戦争は勝ち、革命は防衛される。陣地戦の戦略の永続化はできない。問題は、全面的な動員、戦線に武器を、唯一の指揮権、政治的軍隊、等々のスローガンを放つても解決することはできない。問題は、実現しうることを直ちに実現すれば解決する。

「一九三七年」一月十七日の『トウールズ報知』紙は書いている。「内務大臣の大きな関心は、あらゆる地方の諸グループの権力や、統制に服さないものの権力の上に、国家の権力を樹立することに寄せられている」

何か月もの間、《統制に服さないものたち》を絶滅しようとしたこと、《第五部隊》の清算の問題を解決できないこと、はいうまでもない。内部戦線の抑止は、筋金入りの革命家たちによってしか成就されえない、調査と鎮圧の活動を第一条件としている。諸階級間の協力と中産階級に対するおもねりという国内政策は、政治的に曖昧な分子たちに対する寛容に、不可避免的に導かれる。

《第五部隊》は、ファシスト組織に属している分子たちによってのみならず、穏健な共和国を希望しているすべての不満分子たちによつても、構成されているのだ。そして、《統制に服さないものたち》の追求者たちの寛容を利用してゐるのは、それらの分子たちだ。

内部戦線の清算には、CNTとUGTとからなる防衛委員会の広汎な徹底した活動がその条件となつていた。

われわれは、政治的な組合組織の裏付けを持たない曖昧な分子たちの、人民軍の指導的幹部の中への滲透に立ち会っている。民兵の諸委員会と政治的諸代表は、今日では厳格に政治的な昇級昇進の制度の優越によつて弱められた、望ましい監督を行使していた。それらの委員会とそれらの代表の権威を強化しなくてはならない。

われわれは、不幸な結果をもたらさう。新しい事実、つまり、各部隊全体が、民兵の尊敬も愛情も受けられない将校たちによつて指揮されている、という事実に直面している。この事実は重大だ。というのも、スペインの民兵の大多数の価値は、彼ら自身の指揮官が受けて

いる信頼に直接比例しているからだ。したがって、直接選挙制と下部のものによる罷免権の樹立が必要だ。

重大な誤ちが権威主義的な諸方式を認めることで冒された。それは、それらが外見上そうであったからではなく、それらが途方もない誤ちと、戦争の必要性から見てかかげるべきではない政治目的とを、秘めていたからだった。

私は、イタリア、フランス、ベルギーの、上級将校たちと話す機会を持った。私は、彼らが、現実主義者であることを主張する何人かの新將軍たちよりも、ずっと現代的な合理的な着想を、規律の実際的な必要性について持っているのを示した、と確認する。

私は、社会党が彼ら自身の部隊、民兵第五連隊を結成したように、CNTの軍隊を結成する時が来た、と信ずる。私は、アラゴン戦線で攻勢に転ずることを可能とする指揮権の統一を有効的に実現しつつ、指揮権の問題を解決する時は来た、と信ずる。私は、《統制に服さないものたち》を統制するために使われているので戦線にゆかない、何千という民警と機動隊にけりをつける時は来た、と信ずる。私は、本腰を入れた軍需産業を創設する時は来た、と信ずる。そして私は、革命の防衛をサポーターにジェネする若干の《労働者の権利》や日曜の安息の尊重のそれのような、いくつもの明白なバカげたことにけりをつける時は来た、と信ずる。

何よりもまず、戦闘員たちの高揚した士気を維持しな

くてはならない。ルイジ・ベルト<sup>1)</sup>ニは、ウエスカ戦線  
で闘っているイタリアのさまざまな同志たちが表明した  
感情を解釈して、かなり前にこう書いていた。「そうし  
て社会変革へのあらゆる新しい信頼、あらゆる新しい思  
想、革命的なあらゆる偉大さ、あらゆる普遍的な感覚を  
奪われた、スペイン戦争は、世界の富豪たちが目論む皆  
殺しを避けるために進めなくてはならない、民族独立の  
ありふれた戦争でしかもはなくなった。それは、生か  
死かという恐ろしい問題を残しているが、しかしそれ  
は、もはや新しい制度と新しい人間性確立の戦争ではな  
い。人は、すべてがまだ失われたのではない、というで  
あろう。しかし、実際には、すべてがおびやかされ、包  
囲された。われわれの仲間たちは、諦めたものの言葉、  
ファシズムの前進の際にイタリア社会主義が口にしたの  
と同じもの、つまり「挑発に気をつける！ 冷静さと平  
静さを！ 秩序と規律を！」といった言葉を話してい  
る。すべてが自由放任のままにまかせられてい  
る。そして、イタリアにおけるように、スペインでも、  
ファシズムが結局は勝つ。われわれの予想外の出来事が  
起こらないとすれば、共和派の衣裳をまとった反社会主  
義が、勝利を取めることしかありえないであろう。われ  
われは、われわれ自身を非難しているのでなく、単に確  
認しているのだ、と付け加えていうまでもあるまい。わ  
れわれは、あれほど久しくイタリアとドイツの圧力が戦  
線で増大し、ポリシエヴィキとブルジョアの圧力が後方

で増加している時、われわれの行動がいかにして別のも  
のであり有効なものでありうるのか、いうことができな  
い」  
私は、ルイジ・ベルト<sup>1)</sup>ニの謙讓さを持ち合わせてい  
ない。私は、スペインのアナキストたちは、現在優勢で  
あるものとは別の政治路線を持ちうる、と断言するつも  
りだ。私は、私が最近のさまざまな大革命の諸経験につ  
いて知っていること、私がスペインの絶対自由主義新聞  
そのものの中で読んだことに拠りながら、若干の方針を  
忠告できると主張する。  
私は、君がよりよく革命を防衛できるかどうか、君が  
政府に参加しながらファシズムに対する闘いにもっと大  
きな寄与をしうるのかどうか、それとも君は、君の素晴  
らしい言葉の炎を戦闘員たちの間や後方にもたらしなが  
ら、果てしなく無益なものとなるのかどうか、を知る問  
題を、君は自分に提起しなくてはならない、と考える。  
われわれの政府への参加が持ちうる統一の意味を明ら  
かにする時もまた来た。大衆に語りかけ、マルセル・カ  
シヤン<sup>2)</sup>が三月二十三日の「ユマニテ」紙で、「アナキス  
トの責任者たちは、彼らの統一への努力を増大し、彼ら  
の訴えは次第に聞かれていく」と述べた時、彼はもっと  
もであったのかどうか、大衆に判断するよう訴えるべき  
である。  
それとも、『プラウダ』紙や『イズヴェスチャ』紙が、  
統一をサポートしているものとして扱って、アナキストたち

を中傷した時、それらの方がかもつともであったのかわど  
うか。  
スタリンの独裁的な犯罪、ロシアのアナキストたち  
に対する迫害、レーニン主義的なそしてトロツキー主義  
的な、反対派に対する途方もない裁判についてのスペイ  
ンのアナキスト新聞の沈黙、『労働者の連帯』紙に対す  
る『イズヴェスチャ』紙の中傷によって報復された沈黙  
の、精神的、政治的な共犯性を、大衆に判断するよう訴  
えるべきである。

一九三六年十二月十七日の『プラウダ』紙によって、  
「カタルニヤについていえば、トロツキスト分子たちと  
アナルコ・サンジカリスト分子たちの追放が開始され  
た。この仕事は、ソ連邦で進められたのと同様に、徹底  
して進められよう」と予告された計画の中に、補給のサ  
ボタージュについての若干の策謀が含まれていないかど  
うか、大衆に判断するよう訴えるべきである。

アナキストたちは、政府の中に、消え失せようとして  
いる(埋める)火を護る処女たちとしているのか、それと  
も、敵ないし《全階級の共和国》復興諸勢力といちゃつ  
いている政治屋どもにとって、単に自由の象徴として役  
立つためにずつとそこにいるのかどうか、理解すべき時  
は来た。問題は、代表的人物である人々には理解しがた  
い、危機の明白さによって提起されている。  
戦争か革命かというジレンマは、もはや意味を持たな  
い。ただ一つのジレンマがあり、それは、革命戦争によ

るフランコに対する勝利か、それとも敗北か、だ。  
君にとっての、またほかの同志たちにとっての問題  
は、テイエール(パリ・コミューン)とビスマルクが神聖  
同盟を結ぶ以前の、テイエールのヴェルサイユかパリ・  
コミューンか、どちらを選ぶかだ。君は答えなくてはな  
らない。なぜなら君は、《埋もれている才智》だからだ。  
カミロ・ベルネーリ

国際的に非難されたCNT  
(パリ、一九三七年六月十一—十三日)

CNT代表団のAIT<sup>3)</sup>への報告と、各労働組合中央の  
代表たちのスペインの最近の出来事とその結果について  
の説明と意見を聞いたあとで、一九三七年六月十一、十  
二、十三日にパリで開かれた、AIT臨時会議は、以下  
のことを確認する。

1 最近バルセロナにおいて展開された出来事は、企  
業と国境の管理をCNTから取り上げること、その位置  
やそれが占めている重要な部署からCNTを追い出すこ  
と、その活動家を一掃すること、躍進を見せ始めた社会  
革命を妨げること、それを圧殺すること、を主要な目的  
としていた。

2 この行動はバルンシアとバルセロナの両政府の何  
人かのメンバーの間で何カ月にもわたって協議されたも  
のであり、その両政府にCNTはその代表者たちを通じ

て参加していたし、彼らの知らぬ間に、ソヴェト政府の命令を実行しているスペイン共産党に動かされた諸政党によって考えられた計画に荷担している。

3 この計画は、国際的な性格を持ち、イギリス・アメリカの資本家たちの利益に奉仕しており、その擁護者となったのが、相次いで不干渉、封鎖、地上軍と海軍の調節、調停の手を打った、フランス・イギリス・ロシアの外交である。

4 便宜的な理由のために現在バルンシアの政府によって拒絶されている調停は、皆が諸事実によって広汎な面で時代遅れと見なすことで意見の一致している、(民主主義的な議会主義的な)共和国の、バルンシアの政府によって公式に認められた再興のために、フランスとイギリスの保護下の敵対する諸政治勢力の協商を、反共和平を、目指している。

会議は、それゆえに以下のように声明する。

(a) 軍事的、ファシスト的反革命によって開始された戦争は、スペイン・プロレタリアートの全面的解放の企ての性格を次第に持たなくてはならないし、そのことによって、革命的なものでしかありえなくなる。

(b) 社会革命の救済は、これまで以上に、CNTの支配的な主要な関心事でなくてはならない。

(c) スペインの労働者農民大衆の、特にCNTの旗の下に組織されている大衆の無敵の勇氣への感嘆は、劣悪な条件下の闘争のあらゆる逆境にもかかわらず、依然と

を強制しようとするのではないが、臨時会議は、CNTが、AITによって表明された諸原則と理論に依然として忠実であること、事情が許すようになれば直ちに、諸事件が余儀なくしている誤ちの訂正、CNTの存在そのものにも、スペインならば他の国々における社会革命の救済にも、緊密に結びついている誤ちの訂正を、実行するであろうことを、確信している。

一方、AITは、これまで以上の力と一体性をもって、物質的にも行動によっても、スペイン革命を支持しつづけることを約束する。会議は、それゆえに、加盟している、および友好的な各労働組合中央との共同協定と、スペイン革命の宣伝を強化する手段とを緊急に検討すること、CNTのわが同志たちへの援助を増大すること、そしてあらゆる国において革命のスペイン・プロレタリアートに連帯するゼネラル・ストライキの可能性を準備することを、AIT書記に一任する。AITの最も緊急の義務は、

1 プロレタリア革命を圧殺するという表面上の目的で、スペインにおける闘争に直接にか間接にか干渉している、ファシスト諸国家ならびに民主主義国家に対する、組織的宣伝活動を組織すること、

2 スペインの経験がきわめて貴重な手がかりを与えている経済的な再建についての国際的計画を、できるだけ速やかに作製するために、AIT諸大会の以前の決定を実施すること、

してもとのままである。

(d) あらゆる形のマルクス主義に敵対するAITの傘下に結集した、あらゆる国の革命的プロレタリアートの連帯は、改良主義的な社会民主主義者、PSUCないしPOUMのような、すべての分派ないし下部機構を伴った、スターリン派ないしトロツキー派の独裁的ポリシェヴィズムが、革命の実現にとって不吉でもあり危険でもあるので、過去におけると同様に、依然としてやはり確固としたものである。

(e) 同時に社会変革を伴う革命戦争の遂行は、CNTについては、バルンシアとバルセロナの政府への、あらゆる直接的な参加ないしあらゆる間接的な協商と相容れないはずのものであり、戦争を清算し革命を圧殺するために階級の敵と取引する分子たちで構成される、自称反ファシスト戦線をそのまま維持する目的でなされた、あらゆる政治的、経済的、理論的な譲歩の、CNTによる放棄を必要とする。反ファシスト戦線からのCNTの公式の離脱は、次第に免れないものとなっており、それは、にもかかわらず、ファシズムに対してもともに自称共和主義的民主主義に対しても向けられる、スペイン・プロレタリアートを解放する革命によって戦争が終結することを渴望する、あの戦線内の真の反ファシスト分子たちとの状況に応じた協定を、受け入れるか提案する権利を、CNTに留保させるものである。

CNTに、それが当面受け入れることのできない方針

である。

会議は同時に、スペインで展開されるあらゆる重要な出来事についてのAITの感情を、適当な機会のあるたびにCNTに伝えることを、AIT書記に要求する。

#### フェデリカ・モンツェーニの問題整理

われわれは、フェデリカ・モンツェーニに、彼女の過去の立場を弁明しようとするためには、確かに発言の機会を与えるものではない。しかし、民主主義的な配慮によって与えることにする。というのも、回答する権利は彼女の当然受けるべきものだからである。

スペインにおける戦争と革命の間の政府へのCNTの参加の問題は、細心の注意のいるテーマである。三十年以上ものちに人々がそれについて語る時、それはいつも、少しも調査し理解し解明しようとすることなしに、この上なく仮借ない判断を下すためであった。人々は批判をふりかざす。時勢の力によって政府の地位を占めることとなった人間たち、特に女性を、人々は石で打つ。

一九三七年に、カミロ・ベルネーリ、エマ・ゴールドマン、セバスチャン・フォールがすでに問題を提起している。ルドルフ・ロツカーやマックス・ネットラウのよいうな他の人々は、判断することを差し控え、われわれを信用した。おそらく、各自が理解しついで判断するため

には、若干の点が明らかにされる必要がある。特に、当時の文脈に身を置いてみることに、三十年の長いオベラグラスを通じてではなく、一九三六年におけるCNTと絶対自由主義運動のものとなった状況を考えながら、事態を見てみる必要がある。

すべては、バルセロナの反ファシスト民兵委員会、そこにあらゆる政治上の、そして組合の諸勢力が集まっていた、革命の最初の機関を、「カタルニャ」の地方政府の評議会に変えねばならなかった日に、始まった。それは、本当に必要であったらうか？ この問題は、ともかく委員会の中ですら提起された。それは、集会や会議を通じて、いく夜をも徹して討議された。組合やアナキスト・グループの最も思慮あるすべての人々が参集している。民兵委員会をまったく単独で継続することを決定すること、それは、反ファシスト戦線を解消し、状況に単独で立ち向かうことを選択することであった。なすべきことはそうしたことであったのか？ おそらく。その時、しかしながら、その孤立と一種のクーデタが将来の結果として強いるであろうことを意識した大多数は、反対のことを決定したのである。国家を再構築することとなる諸機関への参加は、この時以来始まった。

さらに理解するためには、全世界の諸組織がわれわれを棄てて顧みなかったこと、他の政治諸勢力の策謀、イタリアとドイツから武器と人員と資金を受けていたブルゴス（ファシスト）の「徒党の前で、武装解除されていたス

ペインへの、メキシコの援助とともに特にロシアの援助で強力となった共産党によって、すでに実施されていた脅喝、を想起する必要がある。

最初の政府への参加は、カタルニャ政府を《自治評議会》に変え、実際には大臣であった人々を評議員と呼ぶことで、偽装された。ファレガスのような、連合の最近のメンバー、あまり思慮のない人々をCNTの代表としてそこに派遣しながら、言訳けが探し求められた。しかし、すでに第一歩は踏みだされていた。

ついで、ラルゴ・カバリエロが、二人の共産主義者を参加させ、CNTにそれに合流するよう促して、彼の第一次《戦時》政府を作った時、それは、悲劇となり恐慌となった。クロンシュタットと、粉砕された絶対自由主義ウクライナの影が浮かび上がった。人々は、《全国防衛委員会》を考えだして、逃げ口上をいった。ラルゴ・カバリエロは何一つ聞こうとしなかった。彼によれば、ブルゴスの徒党を前にして、スペイン民衆が民主的に身を委ねた、共和国の合法政府の存在を国際的に示す、切札を失ってはならないのであった。

最初の会議が招集された。当時CNT書記長であった人物、オーラショ・マルチネス・プリエート、カバリエロ政府への参加に好意的な立場にもかかわらず、地方組織の会議をふたたび招集すること以外、何一つ決められなかった。人々は、全国防衛委員会に参加するだけに甘んじたいと、言い張ったのである。しかし、ラルゴ・

カバリエロは片意地になっていた。

CNTとFAIとがカタルニャ、バレンシア、アンダルシアでは多数派であったとしても、中央部、アストゥリアス、バスク地方では、諸勢力がかなり力を分かちあっていた。社会主義者たちは、強固な組織を持っていたし、共産主義者たちは、いつもながらロシアの援助と右翼の諸勢力の受入れのおかげで、昇天の勢いを見せていた。

オーラショ・マルチネス・プリエートは、会議が彼に与えた信任投票に力をえ、ほかに解決策がないと確信して、すでに結成されていた政府へのCNTの参加のために、カバリエロと交渉を開始した。

CNTの二つの傾向を代表する人物たちが求められた。穏健派として、ロベスとペイローであり、過激派としては、ガルシア・オリベルと私自身であった。われわれは、熱心に討議をした。われわれは、結局は承認した。われわれがいた地点からは、すべてのためらいは《逃避》と見え、《脱走》と扱われた。われわれは、われわれによっても分かれたれねばならない責任を、他にのみ背負わせてはならない、と信じていた。

その後のことは知られている。われわれは、軍の部隊長、警察の長官、刑務所長、政治人民委員、等々のポストを受け入れねばならなかった。われわれは、野心に、権力の渇きに、とらえられていたのか？ いや、誰も、あの時、自分の個人的な将来を気にしてはいなかった。

しかし、正当化の見せかけを探し求めている。人々は今日、不快や驚愕なしに、軍隊化に協力する「労働者の連帯」や「CNT」の綴込みをひもどくことはできない。

CNT=FAIの人々が、いたるところに出向き、一人多役を演じていたすべてのことにもかかわらず、毎日、事態は悪化した。私は当時、「人は同時に、街頭と政府内とにいることはできない」と、いった。われわれは政府内にいた。しかし、街頭はわれわれの手から逃がれていた。われわれは、労働者たちの信用を失った。そして、運動の統一は解体した。一九三七年五月の出来事、ロシアで行なわれたようにスペインのアナキズム運動を一掃するための口実を探したロシアの手先たちによる、完全な陰謀ののち、われわれがカバリエロ政府を離れた日、私の個人的な安堵、そして私は想像するのだが他の人々の安堵の思いは、絶大なものであった。

しかしながら戦争は、実質的には負けていた。革命もまた同様であった。最後の数カ月の間の進むべき方針についての討論は、われわれを分裂させた。共和主義者たちと同じ意見を持つ、最終的な瓦解の前に解決方法を見出すべきであると考えた同志たちがいた。反対に別の同志たちは、希望がなくても、最後まで闘うことを要求した。ホアン・ネグリンは、年末前には世界大戦が起きるのであると断言しつつ、徹底抗戦主義を首唱した。それは心からのものであったらうか？ ともかく、当時CN



T書記長であったマリアーノ・R・ベラスケスは、同じことをいっていた。そして、彼とともに大多数の同志たちが、われわれは、一九三九年九月まで頑張った。ともかく戦争はつづいた。事態は、われわれのために変わつたであろうか？ ビレネーまで数日のうちに到着する電撃作戦を思いつつ、ヒトラーが進めた初期の戦闘のやり方も考えるなら、それは疑わしいと思われる。

戦争が敗北し、大多数の活動家たちが亡命した時以來、CNTの精神的な誤ちの訂正が始まった。多くの同志たちが、(ドイツ)占領下のフランスで、数カ月のちに解放された北アフリカで、政治的逸脱主義(政府の参加)を力こめて非難した。というのも、亡命中に結成しうる政府の中ですら、すべての反ファシスト勢力との協力をつづけなければならぬ、と考える人々が多数いたのである。一九四四年のミュンヘンでの会議においては、まだその方向での動議が可決されている。

しかしながら、(フランス)解放は、全フランス内での、自由な討議とともにCNT諸グループの組織を可能にした。やがて、CNTをその結成以來動かしてきた原則や戦術が著しく粗略に扱われた、不幸など判断される時期を終わりにしようとする人々が、日に日に多数となつていった。

一九四五年五月一日、パリの地方諸連合の大会において、情熱的な八日間の討論のうちに、最初の勝負は政治的参加への反対派が勝ちを収めた。われわれは、自己批

判を行なった。ベンエール地区連合を代表していた私自身、私も、私の個人的経験であつたものについて、われわれの政府への参加の無益さについて話し、この試煉を経て私の信念はいつそう堅固になつた、と述べた。大臣であり、そして当時の表現によれば「反改良主義者」の立場をとつた事実は、「改良主義者たち」が「古典主義者たち」と名づけたものの装飾用の旗の一つに、私を変えたのであつた。

長期の闘争と数多の有為転変が、亡命の歳月を満たすこととなつた。(地下)スペインCNT全国委員会が一九四五年末に、亡命中の多数派の意見に反して、二人の大臣、スペインから来たレイバとオルラン居住のオーラシヨ・マルチネス・ブリエートを、ジエラル政府に送ることを決定した時、改良主義派が亡命中の絶対自由主義運動CNTから離れた。フランスにおける少数派、協力の支持者たちは、おそらく当時までわが国の国内では多数派だったのである。

しかし、時に援けられ、亡命政府の枠内で行動する可能性をまだ信じていた人々の眼を迷いからさめさせて、われわれの立場は、毎日仲間を獲得した。一九四七年のトゥールーズ大会では、反対派の「改良主義者たち」がすでに分裂していたので、満場一致で動議が可決された。それは、どのような政府であろうと政府への参加の扉を決定的に閉ざしている。

以下は、その若干の抜萃である。

#### 原則についての表明

一九四七年十月二十日およびその翌日、トゥールーズで開かれた……大会は、

体験したすべての経験と、最近数年間に世界で起きた出来事のすべては、第一インターナショナルのローガンの下に組織されたプロレタリアートによつて一八七〇年以來追求された道を確認させるものではないので、国家へのあらゆる譲歩は、その強化をしかもたらさないこと、一時的なものであれ権威の原則のあらゆる承認は、立場の事実上の喪失を現わし、完全な解放をはかる最終目標の断念を強いることなので、

……スペインにおける戦争と革命の経験は、大衆的な推進力の下で企てられる努力の不变の価値と、反国家的な、革命的な、直接行動の戦術の、事態の力による再評価を確認したので、

……以上すべての理由により、大会は以下を声明する。

大会は、アナキズムおよびアナルコ・サンジカリズムと同質の、諸原則と、反国家的な、革命的な、直接行動の戦術を承認する。

……その名がどのようなものであり、それを支える党派や組織がどのようなものであろうと、政治的、経済的な国家の原則の上に結成されるすべての権力は、権威の多数の顔の一つではない。

……われわれの運動は、いかなる過渡段階もなしに、われわれの原則と一致する戦術をもつて、自由共産主義の樹立を最終目標としている……。

私は、スペインCNTの場合は、世界のすべての労働者、そして政治的運動の歴史の中で唯一の場合である、と心から考えている。政治への地すべりのうち、そこで何人かの人々が道に迷い、例外なしに混乱した政府内の経験ののち、圧倒的な大多数は原点に立ち戻り、永久にあらゆる政治的な軽率な気分を抜き去り、労働者の直接行動のみが人間を解放し階級社会を廃止する社会変革を進めうる、と確信している。誠実に、心から、軍事的、行政的、政治的な指導の地位を経験した人々は皆、そのことに胸をむかつかせるようになっており、かつてよりもいっそう国家に敵対している。

あるものは、おそらくこう自問するであろう。

「もしわれわれが戦争に勝つていたら、事情は同じだつたらうか？ もし共和国がフランス体制に勝つていたら、われわれの政府への参加のあとに何がつづいただらうか？」

もしわれわれが戦争に勝つていたら、革命はその課程を追求したであろう。何一つ、誰も、七月十九日に民衆の大多数によつて開始され、発展し、成就されたものを妨げなかつたであろう。おそらくそれこそまさに、戦争が敗北しなければならず、革命が圧殺されねばならな

つた理由である。

- 1 『労働者の連帯』一九三六年夏。
- 2 一〇四ページを見よ。
- 3 Canillo Berneri (1897—1937) イタリアのロディイ生まれ、社会主義青年同盟員として出発するが、一九二五年頃それを公然と離れて、アナキズム運動に加わる。ムッソリーニ体制の下で亡命し、多くの国から追放され、ヨーロッパの牢獄の半ばを経験する。ドイツで、アナルコ・サンジカリストたちと接触する。スペイン革命のニュースを聞き、直ちに出发し、戦闘に参加する。バルセロナで、新聞『階級戦争』を創刊する。そのいくつかの記事は、『スペインにおける階級戦争』の標題の下に、一九三八年四月五日の『自由な土地双書』の中に集められた。そこには、アナキストの政府参加に対する彼の批判も割愛されていない。一九三七年五月五日、バルセロナの血まぐさい日々の中で、スターリン主義者たちの命令で警察に逮捕される。牢獄からさらわれ、拳銃で撃たれる。
- 4 一九三七年一月、バルセロナの公開講演会で、フェデリカ・モンツェーニは、ブルードンの弟子、Francisco Pi y Margall (1821—1901) の地方主義を称讃する。これは、カミロ・ベルネーリのもと類似の、ガストン・ルヴァルの非難を彼女にもたらすものとなった。
- 5 ビラネーサ、スペインの小村、そこで多くのCNTの活動家たちが、彼らの組合事務所を荒らされたのち、虐殺された。
- 6 一九三三年、カサ・ビエーハスの労働者たちは、その村の主人となり、そこで自由共産主義を宣言した。民警が、この反乱を荒々しく弾圧した。
- 7 共和国政府は、スペイン領モロッコを非植民地化することを拒否して、帝国主義的な立場をとった。このことは、スペイン共和国に対してモロッコの兵士たちを活用することを、フランコに可能とさせた。
- 8 Jean Zyromski (1890—) 社会党左派 S F I O の指導者、今はフランス共産党員。
- 9 一九三七年二月初めにマラガを砲撃したフランコ派の二隻の巡洋艦が問題とされている。バレアーレスは、三月六日に共和国艦隊に沈められた。すでにヘローネとタラゴーネを砲撃し、マラガ陥落のちに多数の犠牲者をださせたカナリアスは、沿岸航路上で発砲した。そこを通過して逃亡者たちが共和派スペインにたどりつこうと努力していたのである。
- 10 Indalecio Prieto (1888—1962) スペイン共和国の社会主義者の大臣、メキシコで死ぬ。
- 11 第五部隊、共和派戦線の背後に存在したファシスト組織全体に、スペインの新聞が与えた名。
- 12 Luigi Bertoni (1872—1947) スイスのテシノ州のアナキスト、スペイン革命のために尽くした。『覚醒』をフランス語とイタリア語で編集し、彼自身で活字を組んだ。
- 13 Marcel Cachin (1869—1958) 元社会民主主義者、フランス共産党創立者の一人、生涯の終わりまでスターリン主義者。
- 14 A I T 書記、ビエール・ベスナールによって書かれた。国際労働者協会、アナルコ・サンジカリストのインターナ

- 17 16 ショナルで、現在も存在する。  
PSUC、POUMについては、二七一ページを見よ。  
Juan Negrin (1889—1956) 医学教授、右派社会主義者、スターリン主義者の同伴者、まず大蔵大臣で、一九三七年

五月十七日、ラルゴ・カバリエロの後を継いで共和国政府の首班となる。一九三八年四月以後、軍事相。ロンドンで亡命中に死ぬ。